

『大般若経字抄』について

“Daihannyakyōjishō (大般若経字抄)”

住谷 芳幸

文学部文化情報メディア学科文化メディア専攻

(二〇〇三年九月十一日受理)

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,

Major in Cultural Studies and Information

SUMIYA Yoshiyuki

(Received September 11, 2003)

一般に、日本語の歴史的な研究は、存在する「事柄」を通しての研究であった。ここで取り上げる藤原公任撰とされる石山寺蔵『大般若経字抄』を例とするならば、従来の研究は、『大般若経字抄』に存在する音注を通して当時の日本語における漢字音の体系、あるいは構造の究明を目的としていた、または、目的としている。ある文献に存在する音注から全体の体系、あるいは構造を明らかにするという方法は、網羅的な字書であれば有効かもしれない。(もちろん、観智院本『類聚名義抄』をみれば、網羅的な字書であっても、それを扱うことがそれほど単純なものでないことは、ここに注記する必要もないほど明白であるが。)しかし、『大般若経字抄』の様な、何等かの選択により掲出の項目が決定されたに違いない字書については、その様な方法がどれほど有効であろうか。『大般若経字抄』に

掲出された各項目には、『大般若経』を読む上で何等かの必要があり音注が加えられたのである。それらの項目が、いわゆる難字、すなわちその音すら想像できない漢字であれば、その漢字を掲出し音注を加えた理由については、とりあえずは理解できる。(もっとも、難字のみを資料として、全体の体系、あるいは構造を明らかにする事が可能かどうかには、疑問が残るが。)しかし、『大般若経字抄』、または『大般若経字抄』を増補したとされる無窮会本系『大般若経音義』には、現在の知識からすると何が問題であるのかと思われる様な項目も含まれる。もちろん、字書の項目として掲出されているのであるから、それが難字であったには違いない。問題はそれがどの様な意味において難字であったかであろう。例えば、当時の一般的な音とは異なる読み方で読むべき音が、『大般若経』の読

誦音として用いられていたとするならばどうであろうか。その様な特殊な音が存在していた場合、当然読み誤りを避けるために字書の項目として選択されたに違いない。それは、一般的には難字ではないにしても、『大般若経』を読む上では難字なのである。もし、『大般若経字抄』にその様な項目が含まれているとしたなら、その音注を通して明らかになった当時の日本語における漢字音の体系、あるいは構造は、当時の実態を反映していないことは明らかであろう。すなわち、従来はそこに音注が存在する事のみ注目し、それが何故存在するのか、もしくは何故存在しなければならなかったのかという観点から検討される事が少なかったように思われる。さらには、そこに何が存在しないか、そして何故存在しなくてよかつたかという観点からの検討は、さらに少ないように思われる。すなわち、ここで取り上げる『大般若経字抄』について言えば、音注がないの部分の、また掲出されていない項目の検討である。例を挙げてみよう。『大般若経字抄』では掲出された項目の所在を帙数と巻数とによつて示す事は先学も指摘するところである。ところで、『大般若経字抄』では、十九帙一卷から三十帙一卷まで(あるいは、十九帙から二十九帙までとすべきか)からは、単字等が採録されていない。この部分から単字等が採録されていない理由については、次の二つの可能性が考えられよう。

- A 他の部分で掲出している単字等があったが、この部分で掲出する必要がないため、単字等が採録されていない。
- B 他の部分で掲出している単字等がこの部分にはないため、単字等が採録されていない。

すなわちAは、他の部分では正しく読むために注記する必要のある単字等が、十九帙一卷から三十帙一卷までに出現するものの、その部分では正しく読む必要がないために採録しなかったと考えるのである。このことは、日本では他の部分に比べ、この十九帙一卷から三十帙一卷までが読まれる事が少なかった事を示す事になろう。これは、日本における『大般若経』の受容の問題となる。これに対してBは、たまたまその部分に採録すべき単字等が無かつたためである。このことは、『大般若経』における語あるいは語彙のかたよりに、もしくは文体の問題と考えられよう。この十九帙一卷から三十帙一卷までから単字等が採録されていない事は、無窮会本系『大般若経音義』である無窮会蔵『大般若経音義』及び天理図書館蔵『大般若経音義』でも同様である。ただし、この点について必ずしも納得のいく説明はなされていないようである。これは、六百巻に及ぶ『大般若経』の、一八一巻から二九一巻に出現する漢字と、他の部分に出現する漢字とを比較検討するという作業が、人の手作業によつてはほぼ不可能である事によるのであろうか。

ところで、一九九八年三月三十日、インターネット上に「大正新脩大蔵経テキストデータベース(略称SDB)」が立ち上がった。ここでは、『大般若経』を含むいくつかの經典が公開されている。この電子化データを使えば、高速で正確な検索が可能であり、ここでいう存在しない項目の検討も可能なのではないかと期待される。そこで、本稿の筆者は、この大般若経テキストデータを用いて、『大般若経字抄』における掲出語の、『大般若経』での所在確認を行なった。もちろんこれは、存在する項目の確認であり、存在しない項目の確認・検討は今後の課題である。この確認作業の結果、従来指摘

されていない事実が判明したため、ここで報告したい。

『大般若経字抄』では、その掲出された項目の所在を、『大般若経』の帙数と巻数によって示す事は既に述べた。ところで、『大般若経字抄』には巻数を示すのみで、その巻での掲出語を示さない部分がいくつか存在する。それらを示せば次の様になる。ただし以下では、印刷の都合上、注記・音注等を除き掲出語のみを示した。また、漢字の字体を『大正新脩大蔵経大般若波羅蜜多経』での字体に改めた掲出語もある。なお、帙数を示す部分が、問題となる部分よりも数行前に書かれている場合がある。この場合は、帙数を括弧の中に示し、問題となる部分のみを示した。なお、『大般若経字抄』での所在は最初の行の位置である。

- 1 (第八帙)
第七 第八 (六丁ウ二行)
熒赫 勵
- 2 第卅帙 第一 第六 劬 駟(一二丁才五行)
- 3 (第卅二帙)
耗 疲 第四 (一二丁ウ七行)
第五 帥 毅
- 4 第卅三帙 第一 第三 第五
促 擥 鎧 第四 第五 (一二丁才五行)

- 詐 扇掃 第六
第七 瑩 佴 杜 酸 虧
- 5 (第卅四帙)
第五 第七 慨 恃已 (二四丁才二行)
勃 踐
- 6 (第卅五帙)
第六 第七 沮 瞽 瞬 (二四丁才七行)
- 7 第卅八帙 第七 第八 捫 撞 (二五丁才一行)
- 8 第卅二帙 第二 第四 (二八丁才二行)
賑 偃 卅二物
- 9 第卅三帙 第五 第七 赫 奕 (二八丁ウ二行)
第八 第十 筒 措 債
- 10 (第卅六帙)
第七 第八 (一九丁ウ四行)
抗 諒 冤 荼
- 11 (第卅七帙)
第七 第九 捫 卅二相 (二〇丁才二行)

4	3	2	1																			
穀	促	誚	帥	駟	劬	勵	熒	赫	揭	出												
一 三	一 三	一 三	一 三	一 一	一 一	六	六	六	丁													
才	才	才	才	才	才	ウ	ウ	表														
6	6	1	1	5	5	5	3	行														
三 三	三 四	三 二	三 二	三 〇	三 〇	八	八	帙														
三	一	五	四	六	一	八	七	帙	卷													
三 三	三 三	三 一	三 一	二 九	二 九	七	七	般	卷													
六	六	六	六	六	六	五	五	卷														
六 五	六 五	六 〇	六 〇	五 〇	四 八	四 三	四 三	頁														
一	二	三	二	三	三	三	一	段														
三	一 四	一 九	五	一 七	一 六	二 〇	三	行														
				驅			熒	表	記													
	三 三							備	考													
						×	分	天														

表1

例えば、1では八帙七巻は、その巻数を掲示するのみで、注記す

15 (第六十帙)

第四 第六 猜 蜺 度
第七 第八 梯 橙 傲 撮
(二二六丁ウ二行)

14 第五十五帙

涸 秉 第一 第三
第六 嗤 躁
(二二丁ウ六行)

13 第五十三帙

沮 第九
潜 第二 第九
(二二丁ウ三行)

12 (第卅九帙)

第七 第九 恧
卅二字
(二〇丁ウ三行)

べき漢字が掲出されてない。そして八帙八巻で熒赫・勵の二項目が掲出されている様に見える。これは2以下でも同様である。しかし、これらの掲出語について、その所在を確認すると次の表1の様な結果となった。なお、次の表の項目の掲出・丁・表・行・帙・帙・般巻は、『大般若經字抄』での掲出項目・掲出位置の丁数・表裏・行数・帙数・帙内の巻数・『大般若經』六〇〇巻での巻数である。また、巻・頁・段・行は掲出項目の『大正新脩大藏經大般若波羅蜜多經』での所在位置の巻数・頁数・段数・行数である。表記は、『大正新脩大藏經』と『大般若經字抄』との表記が異なる場合、『大正新脩大藏經』での表記を示した。天は天理図書館蔵『大般若經音義』でのその項目の有無を示した。存在する場合を、存在しない場合を×、存在するものの熟語を分離した単字として扱っているものを分として示した。

(四)

10	9	8	7	6	5						
諒抗	債措筒	赫奕	卅二物	偃賑	撞捫	瞬瞥沮	踐勃恃已	慨	虧酸杜佝瑩	癩扇詐	鎧
一一九	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一五	一一四	一一四	一一三	一一三	一一三
ウウ	ウウウ	ウ	才	才	才	才	才	才	ウウ	ウウ	才
55	333	2	333	11	777	33	22		11111	777	6
四六	四三	四三	四二	四二	三八	三五	三五	三四	三三	三三	三三
七七	〇〇八	五	四	四	二	八	七	七	七	六	五
四四	四三	四二	四二	四二	三八	三七	三七	三七	三七	三三	三三
五五	三〇	三〇	二五	二四	二	七八	七七	七四	七六	七六	七六
七七	七七	七七	七七	七七	六	六	六	六	六	六	六
三一〇	一六三	一六一	一五四	七八	七八	六六	九三	九四五	七八	七七	七七
一一	一一三	一一三	一一	二一	三	三	二	二一	三	三	三
二五	二七	二九	二四	二七	一九	二	二三	七一	一九	四	三
								恃已			
		分 ×								分	

の二つの可能性が考えられるからである。bの場合は誤写ということになる。たしかに『大般若経字抄』は築島(一九五九)で「相當に誤寫のある轉寫本(一三頁)」との指摘があるように、必ずしも注意深く書写されたものとは思われない。しかしながら、二つの部分にあるべき注記を、不注意な書写者が誤って纏めてしまったと考えるには、多量すぎるように思われる。また、沼本(一九七八)では「本書中には(例略)の如き例が在り、異本との校合を示す迹が明らかなのであつて、既に長寛二年書寫當時、少なくとも一本の別本が傳えられていた事になる。」(一〇五頁)との指摘もある。別の一本をもって校合を加える際に、二つの部分にあるべき注記を、一つに纏めてしまったと事に気付かなかつたとは思われない。そのため、aの公任原撰本でこの様に表示されていたものとするべきであろう。

もし、以上の様な注記方法が公任原撰本からであったとすると、後世の無窮会本系『大般若経音義』との関係が問題となる。築島(一九五九)では無窮会本系『大般若経音義』との関係につき、「掲出語や注記に大きな異同はありながら、全体として見ればやはり、經字抄を増補して体裁を整へたのが無窮會本系となるやうに考へられるのである。」(四二頁)とする。また、「直接の親子関係とすることは出来ないけれども、相當程度の関係があることはひとめなければならぬと思ふ。」(四五頁)とし、次の様な系統を想定する。(次の系統想定図は、本稿で必要な部分のみとし、多くは省略した。)

信行音義

大般若経字抄

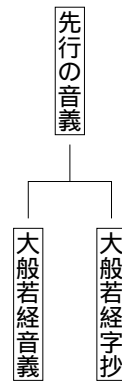
無窮會本系諸本

しかし、『大般若経字抄』を元にし、その項目を増補する事で無窮会本系『大般若経音義』が成立したと考えることは不可能ではないにしても、かなり難しいであろう。前に示した『大般若経字抄』で異なる巻に出現する項目を合せて表示している部分の掲出項目は、天理図書館蔵『大般若経音義』では、すべて正しい帙、巻の位置で掲出されているからである。これは、巻上のみの零巻である無窮会蔵『大般若経音義』でも、確認できる部分については同様である。『大般若経字抄』を増補することだけでは、これらの掲出項目を正しい位置に掲出できたとは考えられない。特に、「第卅三第一 第三」として掲出された「促」は問題となる。これは『大般若経字抄』での誤りであり、正しくは『大般若経』三三一巻(三四帙一卷に相当)に現れる漢字である。これも天理図書館蔵『大般若経音義』および無窮会蔵『大般若経音義』では、三四帙一卷という正しい位置に掲出されている。これも『大般若経字抄』を増補することだけで、正しい位置に掲出できたとは考えられない。

以上の点から『大般若経字抄』の項目を増補する事で、無窮会本系『大般若経音義』が成立した考えることには問題が残る。もちろん、掲出項目についての情報があれば、正しい位置に掲出することも可能であろう。例えば、無窮会本系『大般若経音義』を制作する際に、『大般若経字抄』の元となった音注等の注記を含む『大般若経』が存在していたという様な可能性を考えての事である。そういう状況であれば、正しい位置に掲出する事はできる。しかし、この場合『大般若経字抄』を増補して無窮会本系『大般若経音義』が成立したとするよりも、『大般若経字抄』の元となった音注等の注記を含む『大般若経』を元にして無窮会本系『大般若経音義』が成立

(住谷芳幸)

したとすべきであろう。もちろん、築島(一九五九)で述べる通り、『大般若経字抄』の項目・注記等と、無窮会本系『大般若経音義』の項目・注記等とが、かなり一致あるいは類似することは事実である。とすると、その関係は



などとして考えるべきであろう。なお、築島(一九五九)では、「先行の音義」を信行の『大般若経音義』と推定している。しかし、信行の『大般若経音義』自体が必ずしも明白ではないため、ここでは単に「先行の音義」とした。

さて、同じく『大般若経字抄』と、無窮会本系『大般若経音義』との関係を考えるために、『大般若経字抄』で三十一丁裏以下に掲出された熟語の項目、また三十八丁表以下に「梵語」及び「漢語」として掲出された項目について検討したい。なお、以下ではこれらの項目をそれぞれ熟語・梵語・漢語と呼ぶ。これらの項目が、天理図書館蔵『大般若経音義』の巻音義の部分で掲出されているかどうかを確認すると、次の表2・3・4となる。もちろん、天理図書館蔵『大般若経音義』では、『大般若経字抄』の様に、熟語・梵語・漢語を特別に項目として掲出することはない。しかし、これらの項目が、天理図書館蔵『大般若経音義』の巻音義の部分で掲出されているかどうかは、『大般若経字抄』との関係を考える上で重要とな

る。

なお、次の表2・3・4の項目の掲出・丁・表・行・帙・帙巻・般巻・巻・頁・段・行・表記は、表1と同様である。天では、天理図書館蔵『大般若経音義』での存在の有無を示した。存在する場合を、存在しない場合を×として示した。また、存在するものの、熟語を分離した単字として扱っているものを分、熟語等の一部分を掲出するものうち、一字のみを掲出するものを単、二字以上の部分を掲出するものを部とした。なお、一部分を掲出する場合、その一部分を備考に示した。また、掲出語に異動のある場合を異とした。天理図書館蔵『大般若経音義』での欠落部分については、無窮会蔵『大般若経音義』により存在を確認し、存在する場合を×で示した。大では、『大般若経字抄』の天理図書館蔵『大般若経音義』と同じ帙巻の部分にその項目が掲出されているかどうかを示した。項目の一部分でも掲出されている場合を、掲出されていない場合を×として示した。なお、『大正新脩大蔵経』での所在は、その項目の初出の位置である。ただし、『大般若経字抄』では必ずしも初出の位置から採録されたとは限らない。そのため、前後の項目から、あるいはそこからの採録かとも考えられる位置も示した。また、「陪」については、『大正新脩大蔵経』では現れない。そこで、前後の項目から、三九八巻の「倍」と解釈した。そのため「倍」については初出の位置ではない。なお、「倍」は天理図書館蔵『大般若経音義』では篇立音義に現れるのみである。

表2 (熟語)

満中	輕調	无端	瘡痕	陪	遇中 毒箭	温習	善閑	唐受	唐設	陳葉	不實	扇惑	尔許	尔所	幾許	幾所	久如	唯然	所更	容止	掲出	
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	丁
才	才	才	才	才	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	表
四	四	三	三	三	七	六	六	五	五	五	四	四	四	三	三	三	二	二	一	一	一	行
一〇〇	四六四	四四〇	三九九	三九八	三九八	三六六	三三二	三二七	三〇四	二九一	三〇〇	二九六	一八一	四三八	七	三〇二	一八一	一〇三	一〇一	九	五二	般卷
五	七	七	六	六	六	六	六	六	六	六	六	五	七	五	六	五	五	五	五	五	五	卷
五五七	三四五	二一六	一〇六四	一〇六二	一〇六一	八八六	七〇〇	六七二	五四九	四八〇	五二四	五〇五	九七八	二〇七	三五	五三九	九七五	五七二	五五九	五〇	二九三	頁
一	三	一	一	一	二	三	三	二	二	三	三	二	三	二	一	三	二	一	二	三	二	段
一	三	一	八	二三	二四	二一	三	四	八	一六	二三	二三	二九	二	五	九	一六	三	二〇	一八	二四	行
	輕調	無端		倍									爾許	爾所								表記
						温		唐			陳	實	扇									備考
×	×	×	分	×				単	分	分	単	単	単									天
×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	大

表3 (梵語)

薩迦邪見	鄔波尼殺曇	刹帝利	毘鉢舍那	奢摩他	尼師壇	掲出
三八	三八	三八	三八	三八	三八	丁
才	才	才	才	才	才	表
三	三	三	二	二	二	行
三九四	四	三	三	三	一	般卷
六	五	五	五	五	五	卷
一〇三九	一八	一四	一二	一二	二	頁
二	二	一	二	二	一	段
七	一九	一〇	八	七	九	行
菩薩摩訶薩若生邪見			毘鉢舍那		尼師壇	表記
						備考
×		×	×			天
×	×	×	×	×	×	大

津昵	如々	若時	規利	相像	經久	聲鼓	孤負	趣得	相於	須食
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才
七	七	六	六	六	五	五	五	五	四	四
五八四	五六二	五七九	五九三	五七六	五〇六	五八〇	五七二	五六九	三九八	三四九
七	七	五	七	七	七	七	七	七	六	六
一〇三三	九〇一	九九二	四二六	一〇六六	九七五	九九一	五七八	九四七	九五四	九三九
三	二	三	一	三	二	三	三	三	三	二
一八	一七	二三	二三	二七	二五	二〇	一四	二二	二二	二二
	如如	如如		想像	經久如	經久如	聲鼓	辜負か		
昵とする			規	想像としてはなし	久如	久如	聲鼓としてはなし	負		
分		×	単	×	異	異	×	単	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

蘇末那花	尸利沙	瞻博迦花	迦履迦	曇摩他波羅蜜多	奢摩他波羅蜜多	羯鷄都賣	頗胝迦	阿喻訶涅喻訶	烏瑟膩沙	具霍迦遮魯擎	三摩呬多奢摩他位	末羅羯多	扇搗	多摩羅	多揭羅	堵羅綿	諾瞿陀	迦遮末尼	瑜伽	栗咕毘	吠舍梨	劫比羅	戌達羅	補揭娑	設利羅	迦多衍那	
三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才
六	六	六	五	五	四	四	三	三	二	二	一	一	一	七	七	六	六	六	六	五	五	五	五	四	四	三	
五七一	五七一	五七一	五七〇	四〇五	四〇五	三九八	三八〇	三七〇	三八一	三六九	三六六	三四九	三二五	三一八	三一八	三一	三八一	三〇三	一二七	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇三	八二	
七	七	七	七	七	七	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	
九五二	九五〇	九五〇	九四五	二七	二七	一〇六一	九六三	九〇九	九六八	九〇五	八八八	七九三	六六四	六二四	六二四	五八八	九六七	五四三	六九五	五八四	五八四	五八四	五八三	五八三	五七〇	四五九	
二	三	三	一	二	二	一	三	一	一	二	二	一	一	一	一	二	三	一	一	二	二	二	二	二	三	一	
一	二	八	二〇	二	一〇	一	六	六	六	二三	八	三	一六	一〇	一〇	二九	一八	二一	二九	四	四	三	二九	二六	二一	一	
													扇搗半搗								吠舍梨	劫比羅					
		瞻博迦									三摩呬多			多揭羅多摩羅	多揭羅多摩羅					栗							
		部		×	×						部								×	×	単	×	×				
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

表4 (漢語)

帝網術	天帝弓	杵蔵	正至正行	四雙八隻	大青	帝青	石蔵	随法行	随信行	不動佛	然燈	増語	如所有性	盡所有性	傍生	對面念	掲出
三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	丁
ウ	ウ	ウ	ウ	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	表
一	一	一	一	七	七	七	六	六	六	六	六	五	五	四	四	四	行
三九二	三八一	三八〇	三八〇	三七三	三〇四	三〇四	三〇四	八	八	九	九九	一七	三	三	一	一	般卷
六	六	六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	五	卷
一〇二七	九六八	九六三	九六二	九二二	五五一	五五一	五五一	四三	四三	五〇	五五	九二	一三	一三	二	二	頁
二	一	三	一	三	三	三	三	三	三	二	二	三	三	三	二	一	段
二一	四	七	二	二三	四	三	三	二	二	三	三〇	四	二	一	一七	九	行
							石蔵										表記
																	備考
×								×	×	×	×		×	×	×	×	天
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	大

哀羅筏拏	阿羅茶迦羅摩子	牟呼栗多	駄都	迦末羅花	毘瑟拏
三九	三九	三九	三八	三八	三八
才	才	才	ウ	ウ	ウ
二	一	一	七	七	七
六〇〇	五九九	五七二	五七二	五七二	五七一
七	七	七	七	七	七
一一〇九	一一〇二	九五七	九五七	九五六	九五二
三	二	三	三	三	二
二八	二一	五	三	二	二〇
	阿邏茶迦邏摩子				
	阿邏茶迦邏摩子				
×	×	×	×	×	×

倚謬	却敵	四勝住	十一智	十隨念	十想	九想	衆同分	九有情居智	八大士覺	七聖財	一間	八近事戒	五近事戒	家々	機關	親教	極七反有	順道法愛	四身繫	四暴流	大飲光	善住	妙業藏	正法藏	金剛藏	如來藏
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九
才	才	才	才	才	才	才	才	才	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
四	四	四	三	三	二	一	一	一	七	七	七	六	六	五	五	五	四	四	四	三	三	三	三	二	二	二
五九三	三九八	三	三	三	三	三	三一	三	三	三	八〇	四	四	八〇	三四二	四四	八〇	三六	三六	三六	一〇	二	五七八	五七八	一	五六六
七	六	五	五	五	五	五	六	五	五	五	五	五	五	五	六	五	五	五	五	五	五	五	七	七	五	七
一〇六六	一〇六〇	一	一	一	一	一	五八六	一	一	一	四五〇	一九	一九	四五〇	七五六	二五一	四五〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	五〇	一一	九九〇	九九〇	二	九二二
三	三	二	一	一	一	一	三	二	二	二	二	三	三	二	三	一	二	三	二	二	三	二	二	一	二	二
二二	四	一〇	二五	一七	二一	二三	二三	二三	二三	二三	一九	二八	二八	一九	二七	八	一九	一九	四	三	二〇	二三	六	五	一	一八
綺謬												八近住戒		家家			極七返有						妙業藏	正法藏	金剛藏	如來藏
																				暴	飲光					
×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	分	×	×	×	×	单	部	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

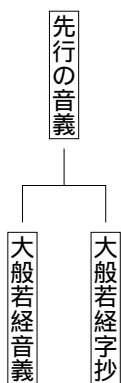
前述の様に、天理図書館蔵『大般若經音義』では『大般若經字抄』の様に熟語・梵語を掲出しているわけではない。にもかかわらず、『大般若經字抄』の熟語の項目・梵語の項目は、その大部分が天理図書館蔵『大般若經音義』の巻音義の部分でも掲出されているのである。ただし、それらの天理図書館蔵『大般若經音義』で掲出された項目は、対応する『大般若經字抄』の巻音義の部分ではほとんど掲出されていない。このことは、『大般若經字抄』と無窮會本系『大般若經音義』との関係を、

信行音義

大般若經字抄

無窮會本系諸本

ではなく、



とすると説明が可能となる。すなわち、『大般若經字抄』の熟語の項目・梵語の項目は、先行の音義に掲出された項目から抜出したものである。ただし、熟語・梵語として掲出したのみで、巻音義の部分には掲出していない。一方、無窮會本系『大般若經音義』も、同じく先行の音義を元として成立した。そのため、『大般若經字抄』で熟語の項目・梵語の項目と、無窮會本系『大般若經音義』である天理図書館蔵『大般若經音義』の巻音義の部分で掲出された項目とが一致するのである。また、梵語の項目はほぼ巻順に掲出されている。

熟語の項目でも初出の位置以外で、ある程度巻順に並べることが可能である。このことも、『大般若經字抄』のこれらの項目が、巻音義であった先行の音義から、巻順に抜出されたことを示すものである。

これに対し、漢語の項目は天理図書館蔵『大般若經音義』と一致する率が低い。また、『大般若經字抄』の巻音義の部分に掲出されることもない。さらに、巻順に抜出された様子もない。そのため、この漢語の項目については、先行の音義とは別な本より採録したか、あるいは、公任が独自に『大般若經』より採録したものである。

以上、『大般若經字抄』における掲出項目と、無窮會本系『大般若經音義』における掲出項目とを比較することで、両者の関係を考えてみた。ただし、両者の元となつたと思われる先行の音義については不明な部分が多い。これについては、今後の検討課題としたい。

参考文献

築島 裕 (一九五九) 『大般若經音義諸本小考』

(東京大学教養学部人文科学科紀要21輯)

沼本克明 (一九七八) 『大般若經字抄解題』

(『古辭書音義集成3 大般若經音義・大般若經字抄』)

使用資料

築島 裕 『大般若經音義の研究本文篇』(勉誠社)

院) 『古辭書音義集成3 大般若經音義・大般若經字抄』(汲古書